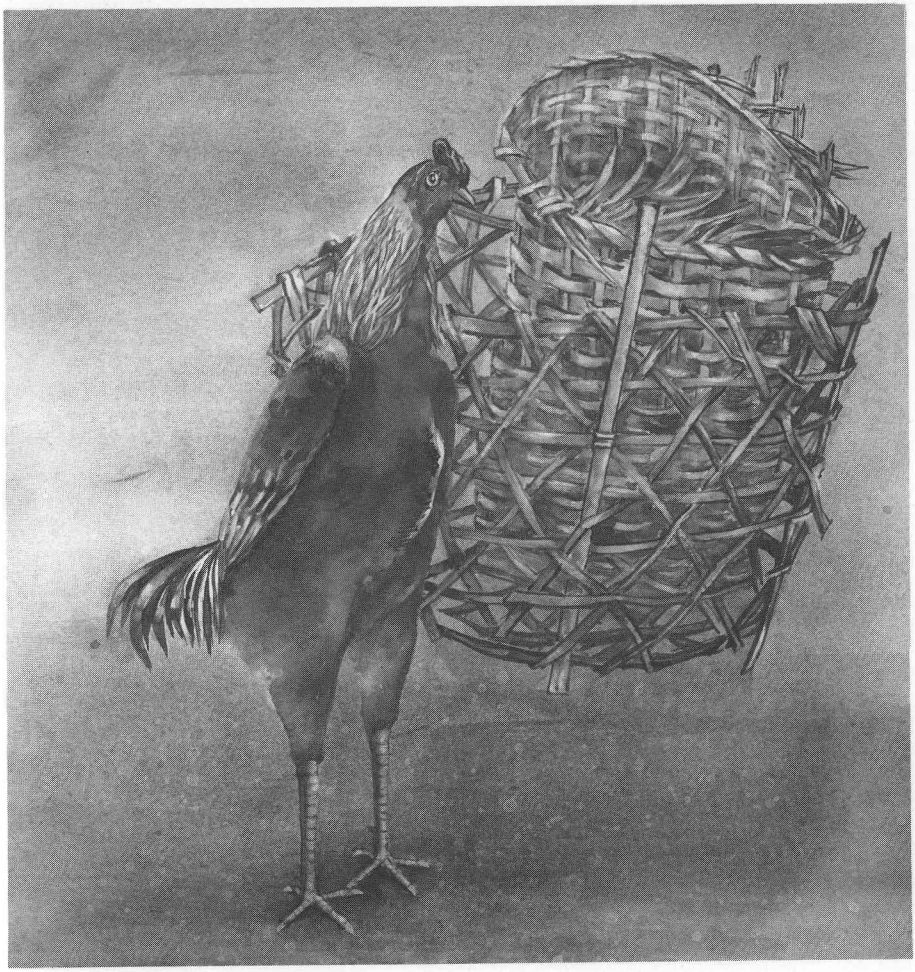
季刊　連句　第42号

平成五年九月一日発行



季刊連句　第42号　目　次

連詩と連句（南柏雑記40）…… 1

半歌仙「初昔」の巻異論（Ⅱ）…… 東　明雅 … 2

「灰汁桶の」の巻　鑑賞 …… 東　明雅 … 6

第三回　猫蓑同人会 …… 9

歌仙五巻　捌　東　明雅　梅田利子　上月淳子
下鉢清子　中川　哲

「馬追」付勝練習二十韻 …… 14

第四十六回　猫蓑会 …… 16

歌仙八巻　捌　東　明雅　穴沢篤子　市野沢弘子
金久保淑子　蒲原志げ子　倉本路子
下坂元子　東　郁子

全国連句いなみ大会 …… 文　秋元正江 … 24

半歌仙十巻　捌　秋元正江　東　明雅　内田麻子
式田和子　下鉢清子　杉江杉亭
中川　哲　中島啓世　原田千町
福井隆秀

新刊紹介 …… 5

雁帛往来 …… 29

表紙（軍鶏）　宮崎龍火子

連詩と連句

南柏雑記40

雅

一九六九年（昭和四十四年）四月、ヨーロッパで有名な四人の詩人がパリに集まって、Rengaを作った。この四人の連衆の一人だったメキシコの詩人オクタビオ・パスは、Rengaの魅力について、その論理的・構成的なものと、また、集団詩としての要素をあげているが、このRengaに対して、大岡信氏が連詩という訳語を付けられたのは、まことに適切であった。

Renga はもちろん連歌であり、彼らが元来、意図したのは異国版の連句・俳諧だったであろうが、それを連詩としないで、連歌・連句と訳すると大きな誤解を生むもとになる。

連詩はもちろん、五・七・五、七・七のリズムはないし、二花三月どころか、季語の意識もない。発句・脇・第三・挙句、あるいは折・面、さらに序、破、急と言った一巻の構成についても、何の規定もない。大体、一巻を何句で纏めるかという規定もないのだから、それはむしろ当然であろう。しかし、そんなものは約束事であるから、どうにでもなる、どうだってかまわないことである。

連詩は言って見れば、親しい詩人が何人か、一台の丸テーブルを囲んで、次々に詩句をつないで行くものである。

1　ぼくはまた帰って来た／この夏の港湾都市に／貿易のためではなく／世の中でまだ最も汚染されていない領域で／声を交換するために　　信

2　この不意打ちの炎暑の地に／子供にかえったバベルの塔／数十の言語がひびく　　ウィレム

3　文法をぴょんぴょんスキップしたり／独楽のようにくるくる回りながら／敷石の数をかぞえかぞえ／ぼくはやっとホテルのバーにたどりつく　　ヘンク（ベルンレフ）

連句（連歌）に存在して、この連詩にないものは何だろう。それは誰でもすぐ気づかれるように「転じ」という意識、あるいはメカニズムが全く存在しないのである。1・2・3は全く一続きの風景・動作・感情で貫かれている。これは明らかに我々の先祖が作り出した連句（連歌）とは決定的に異なる別物である。

「付句は前句にのみついて、打越の句とは全く縁がない。このような関係を何回も何十回も繰り返して一巻の作品が創り出される。……この独特の運動、メカニズムさえ失わなければ、その一巻がどのような形式をとろうとも、どのような式目を採用しようとも、私はそれを連句と認めようと思う」（昭和五十八年「季刊連句」創刊号）

連詩と連句とは全く別の文芸である。しかし、外人と交歓して行くには、連詩の方が分かりやすく、手軽であるかも知れない。

連詩は連詩として今後の隆盛を期待する。

半歌仙「初昔」の巻異論（Ⅱ）

東　明雅

「初昔」の巻　捌　水野　隆

初昔雅は色をこのむより　睦郎
化粧はつかに水仙の空　隆
屋上に仔猫と月と笛吹きと　真紀
地球儀まはすきしみしばらく　實
大硝子のごとき夏ありかげるなり　隆
わが舟させる抜手誰たれ　睦郎
（ウラ）
楽劇の草稿展ぶる木の床に　實
更けし街過ぐ風のたてがみ　真紀
頬痩せて聖母たること肯へり　同
グァダルーペは沈みゆく寺　睦郎
スパナーの油まみれのうつくしく　實
まづ箸付ける飯のぎんなん　睦郎
ふところに骰子入れて月の山　實
姫の素足の草の露踏む　隆
きぬぎぬをSilk Silkと訳し棄て　睦郎
水よりあげて公魚の照り　實
落花浴び象の望郷完了す　真紀
クレヨンいくつ折るゝ永き日　睦郎

この作品（「俳句研究」四月号所載、水野隆捌「初昔」の巻）の第三までに対して、私はこの誌前号に疑問の点を列挙して、解答を求めている。それは①旧暦による歳時記と現代のそれとを一巻の中で併用する可否、②発句が恋句の場合の脇句の対応、③第三の留め方の三点であるが、残念ながら今日まで、水野氏あるいは、この連句会を主催した現代連句シンポジウムの方々からは、何の回答もない。しかし、私はそれはそれでよいと思う。あるいはこの小誌の論文がそれらの方々の眼にふれなかったからかとも思うから、それをなじる気は全くない。要は、私は正しいと思う私の意見を公けにして、より多くの人々に連句に対する正しい知識をもっていただければよいのである。

ただ、私のこの半歌仙「初昔」の巻に対する異論は、決してあの論で終ったわけではない。連句に取って、どんな歳時記を使うか、脇・第三はどう作るべきか、これらも大きな問題ではあるけれども、次に述べる連句の大切なメカニズム、付けと転じに対する異論にくらべれば、それは極めて小さな問題であろう。私はこの作品の付け方、転じ方について大きな疑問があり、異論がある。それで、くどいと思われるかも知れないが、再び、まず、転じについてか

ら私の考えを述べてみたいと思う。

この作品はウラの2句までは下俳諧で各人の付句が紹介されていない。それでウラの3句目から取り上げることにする。

1 楽劇の草稿展ぶる木の床に
2 更けし街過ぐ風のたてがみ
3 頬痩せて聖母たること肯へり
4 グアダルーペは沈みゆく寺

この3句目「頬痩せて聖母たること肯へり」について作者は「まだ悪女でいたいけれど、年をとってしまったので、聖母たらざるをえないという寂しい句なんです」とコメントしている通り、前句「更けし街過ぐ風のたてがみ」とは、全く別のことを述べているが、前句のさびしい気分をつかんだ、いわゆる起情の句であり、人情自の句である。その点ではうまい句である。しかしながら打越の句から考えると、打越の「楽劇の草稿展ぶる木の床に」が人情自の句であり、また、何か淋しい余情をもった句であるから、何か観音開きの感がしないだろうか。

次、4句目の「グアダルーペは沈みゆく寺」、この句も同じである。「グアダルーペはメキシコの聖地で、地名です。このグアダルーペに聖母が出現したというので、非常に有名です。そこに行った時の印象なんです」と作者が言っている通り、この句は前句の聖母からメキシコの聖地が出て来た、従来の連句の手法から言えば、物付けであり、其場の付けでもあろう。グァダルーペというような「なじみがなさすぎる」、「一般的でない」地名を用いることには問題が残るとしても、少くとも、新しさ・珍しさという点ではおもしろいと思う。

しかしながら、この句は人情なし、場の句であるが、打越の「更けし街過ぐ風のたてがみ」も人情なし、場の句であるから、ここでも、場の句の観音開きが見られる。つまり、中の「頬痩せて聖母たること肯へり」が、同じ淋しい気分の人情なしの句に挟まれているため、この三句が一続きの景と解されかねない恐れが出る。

このような三句の転じが全部無視されている連句は、連句と言えるだろうか。私は曽て、次のような意見を述べたことがある。「私は連句が将来いかに変化、変貌しようとも、絶対に失ってならぬものは、作品を創り出すこの文芸独自の運動であり、メカニズムであると思う。付句は前句にのみにつき、打越の句とは全く縁がない。このような関係を何回も何十回も繰り返して一巻の作品が創り出される。……この独自の運動・メカニズムさえ失わなければ、その一巻がどのような形式をとろうとも、どのような式目を採用しようとも、私はそれを連句と認めようと思う」（昭和五十八年「季刊連句」創刊号）、そして、現在でも私はこの意見を固執している。

連歌・俳諧・連句の歴史を通して、これらの文芸の最も大きな特色は、この三句目の転じを重視するところにあり、それがこの文芸のいわば命で、他の和歌、俳句はもとより、外国の詩歌には全く見られないところである。連句が明治

以来一時全く廃れて無視されたのも、正岡子規が外国の文学にないこの三句の転じを嫌って、連俳非文学の説を出したからに外ならない。

だが、外国文学にあろうがなかろうが、日本においては、連歌はすでに千年の歴史をもち、俳諧でも四百年以上の歴史をもって、文学として認められて来た。宗祇の水無瀬三吟、芭蕉の七部集の俳諧、その文学性を否定することは、誰にも不可能であろう。

連歌では、三句の転じをなすために、体・用の法を用いた。例えば水辺の語を

体　海・浦・沼・河・池

用　舟・魚・海人・波

などに分類して、三句続ける場合、用・体・用または体・用・体と続けることを禁じたのであった。この手法は貞門俳諧のころまでは一応守られたが、その後、人間社会の生活を詠んだ句が中心になって来ると、体・用のかわりに、人情の句を自・他、人情なしの句を場の句として、三つに分けそのそれぞれが打越にならぬような方法を考えたのが芭蕉である。

鳶の羽も刷ぬはつしぐれ　場
一ふき風の木の葉しづまる　場
股引の朝からぬるゝ川こえて　自
たぬきをゝどす篠張の弓　自
まいら戸に蔦這かゝる宵の月　場
人にもくれず名物の梨　他

この見事な三句の転じの方法は、後に芭蕉の門人立花北枝によって整理され、「付方自他伝」として残されている。中興俳諧の蕪村や几董なども忠実にこの方法を用い、几董には、初心者に自他場を教えた名著「付合てびき蔓」がある。

ところが、明治以後の連句では、この三句の転じは全く省みられず、自他場の法は忘れ去られてしまった。

砧打つ灯と知りてより足転く　自
うちほゝゑみて物いはぬ君　他
草に寝て軍馬の手網はなさずに　自
名を止むべき一句なりとも　自
朝夕に誦す経ながら間違ひて　自
涼み将棋に出来し人垣　他
車からさと現れしもぐり医者　他
ひとりの女月の土堤ゆく　他

（「遣羽子や」の巻）

右は高浜年尾著の「俳諧手引」（昭和二十一年刊）所載、高浜虚子捌きの一巻「遣羽子や」の巻のウラの折立から八句目までである。この書の奥書に年尾は「俳諧の手引書というものが世間に甚だ乏しいことを知って居る私としては、このこと（手引書を書くこと）は誰かが為さねばならぬことであると気付いた。」と書いている。昭和二十一年と言えば、連句（俳諧）のいわば、どん底時代であろう。その頃に手引書を作ったというのは大変なことであったと思うが、この書には、付け方についてはいろいろの説明があるけれ

ども、転じ方については何も触れていない。おそらく、虚子は自他場というようなものは念中になかっただろうし、三句の転じに就いても、はっきりした概念はもち合わせていなかったのであろう。

子規が明治二十六年、「連俳非文学論」を公表して、連句衰亡の元をつくったことは有名であるが、弟子の虚子は連句に興味を示し、俳誌「ホトヽギス」に連句に関していろいろ発言し、その中で「俳体詩」というものを提唱した。それは、連句の中から、意味的連繋をもったフレーズを抜き出し、これにヒントを得て創り出される詩である。即ち、連句の中で転じのない部分のみを取り上げる詩である。彼はまた、昭和十三年四月「誹諧」という雑誌を年尾に出させ、昭和十九年まで続けたが、この雑誌に見られる連句についての考え方も全く変化していない。

要するに、今日の「転じ」のない連句（俳諧）を作った張本人は高浜虚子であったが、俳壇の大御所としての存在があまりにも大きかった為に、それ以後の連句はみなその害毒に侵され、自他場を無視した、転じの全くないものとなってしまった。これは、彼の言うように俳体詩ではあっても、決して連句ではなく、いわんや芭蕉の俳諧とは、およそ違った別のものである。

私は「転じ」の存在こそが連歌そして俳諧と流れて来た日本の座の文学特有の文学性であり、それを守らねばならないと考えている。だから、自他場をきびしく言って来たのであるが、本当のところは、自他場でなくても、何か新しい三句の転じの方法があればと考えるのである。それはあたかも、芭蕉が古い体用の方法から抜け出して、新しい自他場の考え方を創り出したように、芭蕉時代の自他場にかわる、新しい三句の転じ方が欲しいのである。この「初昔」の巻が、自他場の方法に依っておられないことは明らかであるが、さればと言って、別の新しい三句の転じの方法を用いられているとも思われない。それでは連句ではないのではないかと思うのである。私はこのような作品に高い評価はあげられないのである。

次号ではこの作品の付けについて論じてみるつもりである。

（未完）

☆新刊紹介☆

芭蕉の恋句　　**東　明雅　著**

本書は昭和五十四年六月岩波新書（青版）として刊行されたが、而後絶版になっていた。今回、「岩波新書の江戸時代」シリーズの一つとして、特装本で復刊されたもの。

定価　千五百円

「灰汁桶の」の巻鑑賞（Ⅳ）

東　明雅

ものおもひけふは忘れて休む日に　　蕉
　迎せはしき殿よりのふみ　　来

（現代語訳）せっかく宿下りして日頃の物おもいを忘れている所に、またまた、殿から早く出仕するようにせき立てる手紙が届いた。

（付心・付味）心付。前句が示している人間の境遇に、いかにも適切な事件で受けている。位もよく合っているけれども、前句の「……休む日に」というにの字が、前句と付句とをあまりに安易に結びつける働きがあるため、「風韻に乏し」とか、「膚浅である」とか言われている。面影の付（説明は後）

（転じ）これは人情なし、場の句である。しかし、内容は女性が殿からの文に困惑している気持を述べているが、打越の女性がただの奉公女であったのに対して、この句の主人公を殿の愛妾などと見立て替えしている。

（補説）前句は恋句であるから、去来はぜひ恋の句で付けなくてはならなかった。そして前句の「ものおもひ」を、人を恋うての物おもひから一転して、人から愛され過ぎてそのために悩む女性の像にしたのは手柄である。そして、そのモデルになったのが、おそらく源氏物語桐壷の帝と桐壷の更衣の物語であったであろう。その源氏物語の面影を世話化（「芭蕉連句全解」）、庶民化（「古典文学全集」）という指摘は恐らく正しいと思われる。ただ、これら多くの諸書が、「心付にて膚浅の付け」としているのはいかがであろうか。この付けは表面は殿よりの文であるが、その奥には殿よりの深い愛情のこもった文を貰って嬉しいけれども、その裏にある様々な問題に悩み苦しんでいる女性の姿をはっきり描き出している。だから、読者にはあの桐壷更衣に対するのに似た同情が湧く筈である。

しかも、打越の人情自の句に対して、この句は、人情自の句らしい内容を持ちながら、自の句とせず、文という恋の詞を使って、さっぱり人情なし、場の句としている。このような点にも、行き届いた去来の心遣いが見られ、決して膚浅（うわっつらだけで、あさはかなこと）の句という謗りは当らないと思う。むしろ、あまりにこの句がうますぎて、しかも前句に「……休む日に」とあり、前句と付句があまりに、安易に結び付けた為に、かえって、風韻（趣があること・風雅なこと）がないとされたのは、去来に対

して気の毒であった。

また、麦水や魚潜が、この主人公を平家物語の妓王の面影と取ったのは、この句の「ものおもひ」をあまり真正直に取ったためで、「棄てられての物おもひ」（妓王の場合）と「愛されすぎての物おもひ」（桐壷更衣）とを比べると、後者の方が前句の見立替えもよく利いているように思われる。

さらに、この主人公を男として、「もの思を忘れてといふ人は藩中武士にて、殿の御意に叶ひ、何事も彼にあらざればならぬといへる御側さらずの人と見て、たまたまの非番にて私宿に休み居るを、例の御意に入て、非番にても召るゝ人と付たる也」（「猿みのさがし」）の説もあるが、これは恋句は一句で捨ててはならぬという式目を忘れた解釈である。

迎せはしき殿よりのふみ　　来
金鍔と人によばるゝ身のやすさ　　蕉

（現代語訳）

里帰りした娘のところに、殿から迎えの催促が来る。その親父も取り立てられ、金鍔と人から呼ばれて安楽な暮らしとなった。

（付心）向付。前句の殿、またはその手紙を受け取る女性に対して、別の人物を出したもの。

（転じ）打越の女を男に見立替えをし、また、打越の自の句をこの句では他の句としている。恋句から離れ、安楽な気分となる。

（補説）まず、金鍔とは何か、もちろん、金鍔は黄金または金色の金属で作った鍔であるが、それをもって仇名とされるのは、どのような人であるか。大別して次の五つに分類できるようである。

①御用達の町人の幅利き、「一書に用達の町人の並ぶかたなき派利にして、結構作りの腰のものをきらめかす…」（「大鏡」）

②殿のお気に入りの者、この説は「婆心録」・「付合評注」・「古集弁」・太田水穂・隷原退蔵・中村俊定・「金づくりの刀の鍔のことで、当時の伊達風俗のひとつであったが、ここは主君の寵愛をほしいままにする人の異名…」（中村俊定「日本古典文学大系」）

③左うちわの者、樋口功・天野雨山・伊藤正雄・阿部正美、「古註多く之を、前句の女性を殿の覚えめでたき侍に見立替した付句と解くのは非で、強ひて前句の人物との関係をいふなら、主君の寵愛を鍾めてゐる者の親の態などと解したら、才能も無い者が娘故に取り立てられて、所謂左団扇に世を過すなどの例は、稗史小説の類にも多く見えるので、却て二句の移り変りも無理なく肯けるであらう（天野雨山「評釈」）

④富みて華美を誇る者、幸田露伴、萩原蘿月、広田二郎「刀脇差の鍔を金で装飾したものをいふ。富裕な、伊達好みの者が多く用いた。ここでは、さうした華美な風をした者の渾名として仮に設けたものである。広田二郎「芭蕉連句集」

⑤全く役に立たぬ者、折口信夫、「金鍔、武士は金々した鍔はしてない。普通は真鍮の鍔をしている。あいつはばかだ、役に立たないといわれている。そういう身の安易さに感謝している。他の家には、やってこい、やってこいとお召しがあるが、うちでは、殿様が鼻もひっかけない。殿さまの機嫌なんかに拘泥しない、超越している生活が安易だ」（「俳諧評釈」）

右の諸説を比較してみると、①・②・④はただ、前句の女性を男性に見立替えしただけであり、たとえば、「お気に入りの者」としたところで、それが主君の前に直接呼ばれるとなれば、いろいろに気苦労があって、「身のやすさ」という語は不適当のように思う。それに対して、③の説は殿の寵愛される女を娘にもつ者の身にとって、「迎せはしき」は娘のところへの文であるが、それは直接、自分に関するものではなく、自分はあくまでも左団扇の生活を楽しんでいる様にしているのがよいように思う。さらに⑤もおもしろく、その境遇はまことに「身のやすさ」であろうがそんな役立たずを金鍔と呼ぶかどうか疑問である。

尤も、金鍔には直接「左団扇の身」という意味はなく、これは雨山が言うように辺幅を飾る者を蔑んで言う言葉と取るべきであろう。世間からねたまれ、悪口を言われながらも、それを無視し、気楽な生活を送るものと考えれば、変化があっておもしろい。

さらに、「小刀に金鍔」という諺がある。大きな刀につけてこそ立派な黄金の鍔を、小刀に付けるのは、物事の釣り合わぬこと、似合わぬことを言う。娘が玉の輿に乗ったお陰で、急に出世して、贅沢になったが、それがどうも似合わない。そのような意味から用いられた仇名でもあろう。「太平の武家社会では、槍一筋の功名出世は望みがなく、鳶が鷹を生んだ幸運の方に立身の可能性があったに違いない。ここには芭蕉の皮肉な笑ひがあるやうだ」（伊藤正雄「芭蕉連句全解」の指摘は鋭い。

金鍔と人によばるゝ身のやすさ　　蕉

あつ風呂すきの宵々の月　　兆

（現代語訳）金鍔と人から仇名で呼ばれる身は気楽なもので、毎夕ごとに熱風呂をたしなんで、さっぱりした気分で月を眺めるのである。

（付心）其人の付け、月は投込みの月である。前句の人の位を見定め、その生活の一端を描いた位の付け。

（転じ）人情他の句（打越は場の句）

（補説）風呂は蒸風呂、現在のサウナ風呂で、浴槽に湯を湛えて入るものではない。尤も、この蒸風呂、気浴の風習は、近世期中頃から廃れ、忘れられたので、古註の多くは自宅の水風呂（すいふろ）で湯をわかして入る体に解しているが、明治以後の註釈書は、町の風呂屋（当時、江戸・京・大阪をはじめ、各地で流行ったもので、湯女というものを置いて、客に洒色を供した、遊女屋紛いのもの、その実態は「好色一代男」巻一ノ六、「好色一代女」巻五ノ二などに悉しい。）と解しているものが多い。

（以下、次号）

第三回　猫蓑同人会

歌仙五巻

平成五年六月九日
於　清澄庭園涼亭

玫瑰

雅子妃殿下の御紋に因んで

玫瑰の咲きの盛りや雨晴るる　明雅
二重虹たつ名苑の池　徒司
ゆらゆらと嬰吊床に眠るらん　遊司
歩回り将棋未だ終らず　澄子
ソナチネの音に誘はれて秋の蝶　啓世
山脈遠く残る眉月　同
自転車で紅葉の並木駈けぬける　遊同
マーカーペンで書きし恋文　澄同
全力をあげてお護り致します　雅澄
九官鳥が告ぐる神託　遊雅
銭湯の下駄箱いつも決めてをり　司遊
軒のつららを肩で撫斬る　澄司
八重州口スモッグに出る赤き月　遊澄
「はんぱ」「はぐれ」の屯する角　雅遊
珈琲に凝って蘊蓄御披露し　世雅
シルバー・シートで通ふカルチャー　司世
右左岐るる花の思案坂　澄司
浅蜊蛤売ってゐる店　澄

東　明雅捌

摩崖仏細き線彫り春惜しむ　澄
猫が友達リタイアの後　遊澄
生き生きと語る小錦布哇場所　澄遊
椰子の木陰に涼風の浜　司澄
手がふれてそれがそのままなりゆきに　遊澄
飲めばよかった「愛の妙薬」　澄遊
デルフトの遠州好み茶懐石　世澄
だての薄着のひきし鼻風邪　同世
初日記夢の体重書き添へぬ　澄同
船の汽笛の響きくる窓　遊澄
「美少年」桂男の酒酌み交はす　司遊
コンビニエンス探す新蕎麦　世司
良寛の天上大風秋の声　雅世
床の懸軸ゆする物の怪　世雅
孫たちのトランポリンを楽しめる　遊世
木の芽起しにぬれそぼつ丘　世遊
散る花にまた来る春をたのみつつ　雅世
ががぎぐげご蛙鳴くなり　世

白菖蒲

水の輪の末広がりや白菖蒲　利子
　しばし佇む釣殿の端　正江
講演会レジュメ細かに書き上げて　千町
　いつもの時刻碁仲間が来る　隆秀
見え隠れ雲のあはひに弦の月　美保
　もろこしを焼く匂ひただよふ　同
ピリカメノコ・ベカンベ祭刺子着る　町
　濃いめのルージュさせし受け口　秀
妹よ誰にもお前やりたくない　町
　鎧仏の在す山裾　江
流暢に異国人の里言葉　町
　総合病院順番を待つ　江
猫かぶり猫背猫目と隣り合ふ　保
　ボーナスしかと懐の月　秀
小名木川遠火事ぼっとあがりたり　江
　酔って気さくな鳶のお頭　秀
初花に階のぼる当歳児　江
　穴を出る蟻触角を振る　町

梅田利子捌

種案山子岬巡りの路線バス　保
　爺の寡黙に婆の饒舌　江
靴下に電球入れて継ぎし日も　町
　ソナタはすべて短調が好き　保
香りなきサハラ砂漠の石の薔薇　町
　汗しとどなる牧師洗礼　秀
招かれて「夢の女」を見に行かむ　同
　分別よりも愛しさが先　町
先生とまだ呼んでゐる幼な妻　江
　床屋へ三里コンビニへ二里　同
月を浴び老猿の毛の光りをり　町
　おしゃれな籠で貰ふ松茸　秀
美術展搬入終へし静物画　保
　ボリュウムあげてマイク呼び出し　利
走り抜くパリダカールのカーレース　町
　焼おにぎりに醤油たっぷり　江
幹に耳当てて花守り藤右衛門　利
　巣立ちの鳥を写すアングル　保

新樹

洗はれし新樹輝く佳き日かな　淳子
　緋鯉の跳ねる苑の林泉　本屋良子
夏座敷水彩の額掛けかへて　好敏
　配達の人鳴らす呼鈴　志げ子
月まろし塾へ行く児の賑やかに　達子
　テレビ桟敷で相撲観戦　げ
お土産の蜂の仔つまみコップ酒　良
　かまととぶってすがりつきたる　達
こりゃ駄目だ頼りにならぬ優男　げ
　下半身は別の人格　良
竪琴の「牧神の午後」奏でゐて　敏
　オリーブ搾る小屋に寒月　良
放ちたる大き嚏を二つ三つ　敏
　漱石先生鼻毛ならべて　達
裏町に井戸端会議まだ残り　げ
　亀の子たはし東京の産　達
花づくし亭主答へる茶器の銘　げ
　オアシス使ひ活ける山吹　敏

上月淳子捌

らくだ寝るキャラバンサライ班雪舞ひ　げ
　髭の看守に賄賂贈らん　敏
元宰相深く静かに潜航し　達
　寓と表札をんなかしづき　良
何処までが阿呆か賢か恋の道　げ
　別れてみればおかめひょっとこ　達
涼風に河原舞台の狂言師　良
　鱧の湯引を酢味噌にて喰ふ　敏
爺様の「ちょっと来い」には油断すな　達
　健康食品山と積み上げ　良
冥想の椅子に繊月仰ぎつつ　同
　鵙の高音に偲ぶ故郷　敏
御遷宮み柱川を逆のぼり　良
　近鉄特急ストライキなし　敏
東西の煙管蒐集飾りたて　げ
　春の炬燵にうつらうつらと　達
笑み給ふ夢違観音花の中　淳
　天まで昇れ揺するふらここ　敏

花樗

仰ぎ見る梢の深さや花樗　清子
瓢虫の待ちかねし晴　弘子
鱧の鮨五彩の皿に盛るならん　元子
誕生会の子らが集まり　千雪
漸くに築山越しに居待月　杉亭
露を結びて玻璃戸しづもる　元
カウボーイハットあみだに牧閉す　同
バーボン受けるテーブルの上　亭
ちょっと見が良いと早速すりよりて　弘
日本語うまくなった新妻　雪
ゆったりと大きな水車回り出し　弘
名物の店いつも繁昌　亭
寒念仏月をそびらに鉦叩き　元
モザイク模様のショール編む人　弘
年会費只になるまで生き抜くか　元
餌を啄む手乗り文鳥　雪
花爛漫太郎冠者いざおん前に　元
一切合切忘れのどけし　同
　　雪

下鉢清子捌

春愁の旅の荷物を棚に乗せ　弘
沖の小島に寄せてゐる波　清
与野党の並立連用いつ果てる　亭
恩師の端溪秘蔵してをり　元
ななとせに亘る思ひを打ち明けて　弘
炎ゆる抱擁つづくくちづけ　元
足跡のサワラ沙漠に消えて行き　亭
バザール天秤計る金塊　雪
ぐびぐびと缶珈琲を喇叭飲み　弘
刺子稽古着竹刀担ぎぬ　元
月今宵塑像の影のくっきりと　雪
夜想曲聴き灯下親しく　亭
葡萄園コリーを放ち共に駈け　元
だまし舟折るリハビリの母　清
新聞の予報通りに雨となり　弘
袋に入れて生ごみを出す　亭
戸隠の神をろがみぬ花の頃　清
棚田を遊ぶ黄蝶白蝶　雪

梧桐

梧桐や講釈席の跡に佇つ　哲
　虎が雨とてつぼめたる傘　和
オフィスビル冷房もよく整ひて　子
　ポケットの中キャラメルの粒　郁
高速艇見送る波止場繊き月　子
　荷物を置けば竈馬飛出す　あかり
石段（ウ）は金比羅祭人の列　麻
　飲まなきゃ損々樽の生酒　子
間違った電話番号教へられ　よしえ
　田舎者だがネアカ明朗　り
サポーター腕にミサンガ顔に筋　麻
　今日の佳き日に日の丸を揚ぐ　和
鳩無心に遊ぶ月の池　郁
　遠くに響く焼蕎の声　和
全員がノットギルティ陪審員　郁
　自信の英語うまく通ぜず　え
遅れ咲き安曇野の花淡くして　麻
　親を離れて駆ける若駒　和
　　郁
　　り
　　え

中川哲捌

春昼（ナオ）に撮りまくるなりカメラマン　郁
　プライバシーを言ふな売れっ子　麻
にきびです悪い病じゃありません　和
　姑は嫌弟は好き　り
うねり串化粧塩して鱚焼かれ　郁
　河童忌なれば柾下駄を履く　麻
手水舎をききそびれたる老つらし　郁
　夢のトルコに誘はれし旅　和
玻璃の壷東遷遥か世は天平　え
　娥眉嫋々と月になまめき　郁
こちとらはばったいなごと割床で　和
　秋狂言の果てて川舟　哲
残業（ナウ）をぼやきしこともなつかしく　え
　ファミコンゲームいつも子に負け　郁
富士山のペンキ画背に薬の湯　郁
　入学式の髭をあたりぬ　和
碑の花に埋もれし古刹あり　麻
　ゆらりゆらりと炎ゆる糸遊　り
　　哲
　　え

馬追

付勝練習二十韻

東　明雅

投句締切
10月20日

ふるさとや馬追鳴ける風の中　秋桜子
撫子残る月代の道　達子
秋深し篆書一幅書上げて　よしえ
ゴルフのクラブ磨く縁先　遊

付

治定　向ひ家の大戸を開き婚の使者　和弥
佳作1横浜に日本一ののっぽビル　千雪
同　2お揃ひのバッグ楽しきミラノ柄　雅代
同　3長唄の晒女もどき新体操
同　4ベビーカーえくぼも同じふたごちゃん
同　5久々に会へば保険を勧められ
同　6同行会車中で気勢盛り上がる
同　7駅頭はラッシュアワーの人の波
同　8凄腕の女社長の目に止まり
同　9バーテンダー銀のシェーカーカクテール
同　10古本屋おゐど大きく立ち読みす
同　11一輪車巧みに漕げる子供達
同　12札所寺内緒で形に破戒僧
同　13土曜日の休みの隣家賑はへり
同　14妻はまた湯元巡りの吟行に

※っている晒女の芸を見ているさまであろう。長い布をひらひらさせる踊りは、まるで新体操のゲームを見ているようだというのは一つの発見であり、おもしろいけれども、前句の人と晒女の間にテレビというものが入っているだけ、迫力に欠けるところがある。4これはかわいい句で、クラブを磨いてるおじいちゃんの眼の前に、ベビーカーにのったお孫さんが庭先から登場した景であろうか。5打越と前句がともに自の句、この句は自他半であるけれども、あまり転じが利いていない。6、7、この両句はともに車中あるいは駅頭の状景であり、前句でクラブを磨いた人がいよいよゴルフに出かけたところを描いたのであろうが、連句では「続きを言うな」という鉄則がある。8これははっきり恋の句である。恋句でもよいことは既に述べた通りであるが、この句は何か心付けみたいな感じがして、女社長の目にとまった秘書となってゴルフのクラブを磨く破目になったというように、強く言えば何か原因、結果を示していたかのように取られかねない。それが難点である。9バーテンダーがクラブを磨いているとすれば、銀のシェーカーなど不用だし、バーテンダーとクラブを磨く人を向付にしたとすれば、場所がおかしいことになろう。10これは女子学生を描いたのだろう。おゐどは俳味があるがそれだけに折立としてはいかがか。11ベビーカーの句と似た状景であろう。クラブを磨く人の嘱目の句としておもしろい。12これは「……内緒で形（かたち）に破戒僧」と読むのであろうか。破戒僧が札所寺にかけこんで、内緒で僧形にして貰うというの

同　15通販で揃へた指輪ネックレス
同　16離陸せり禁煙サインいま消えし
同　17大見得を切ればおひねり飛ぶ芝居
同　18よく見れば恐竜ではなき爪跡なり
同　19眉太きプロに手ほどき誘はれし
同　20塩煎餅ジノリの皿で運ばるる
同　21年収を越えるとパートに休まるゝ

二十韻のウラの折立は、月の定座に当たるが、この巻では脇に月が出たので、雑の句となった。雑の句でも、折立であるから、なるべく、形のととのった丈高い句がよい。その点、ここで恋の句を出すと、いわゆる待兼の恋になるけれども、品格のある恋句なら、許されると思う。

その点、治定の句ははっきりと恋句である。ゴルフのクラブを縁先で磨いていると、向い屋の大戸が開いて婚礼の使者がやって来たという情景は、意外性もあっておもしろい。原句は「……大戸開きて……」とあったが打越の腰に「て」の字があるから一直して「……大戸を開き……」と改めた。この方がより風格があるように思う。向付である。

佳作1の句も、縁でクラブを磨いていると、前景に日本一の超高層ビルが見えるという、其場の付け、これもよい付味であるが、一連が場・場・自・自と来ているので、もう一句人情が欲しかった。佳作2はいかにも新しいセンスがあって、第三までの古めかしい気分の転じが十分であり、かつ、前句の新しさによく付いている。これは恋の呼び出しである。3これはクラブを磨いている人がテレビに映※であろうか。そして、その破戒僧がゴルフのクラブを磨くのであろうか。どうもそれらの点がはっきりしないのである。13これは治定の婚の使者の来る向ひ屋の景と似ているが、治定の句ほどの具体性がなく、意外性もないために、迫力の点で劣るのはやむを得まい。14これは一番普通な付け方であろう。妻はさっさと温泉巡りに、残された夫はゴルフのクラブ磨きにと、何かあわれが感じられるけれども、このような作句の構図はあまりにもありふれたものではないだろうか。15これは佳作2のミラノ柄のバッグとよく似ているが、具体性が乏しい。16これも6・7と似ている。この付心はどうも分からない。17これは温泉場の宿屋で、一方では縁側でクラブを磨く人が居り、一方宿の舞台では出演の役者におひねりをなげる観客がいるというのであろうか。全くあり得ないとは言わぬが多少無理であろう。18縁先のどこかに置かれたものを言っている。珍しいとは思うがいかにも語呂が悪い、「よく見れば恐竜でなき爪の跡」とすれば、すっきりするし、現代は恐竜ブームだからおもしろいであろう。19これも自他半の句である。5の句の感と近いが、何か恋の呼び出しとも感じられる。20ジノリの皿とはいかなるものか。ゴルフのクラブに塩煎餅はあまり付味がよくないのではなかろうか。21税金の関係のことを言っていると思うが、一句の意味も曖昧であるし、前句との付心もはっきりしない。

次はウラの二句目、前句が恋だから恋の句を付けること。

第四十六回　猫蓑会

歌仙八巻

平成五年七月二十一日
於　深川芭蕉記念館

青時雨

青時雨像の翁は笑みしまま　明雅
夏萩の咲く庭の片隅　信子
地図拡げ登山のプラン立つるらん　代々子
エスプレッソの碗をあたため　正江
望の月笛喨々といづくより　八重子
落鮎を釣る人のあちこち　八千代
藁塚の幸手栗橋古賀めぐる　江
つい飲みすごすコップ酒なり　八千代
眠くなる癖を承知のクラス会　八重子
摩利支天様閨のくらやみ　江
飼猫の髭を抜かれて二三日　信
第九を聞きてペーチカの月　代々子
痛風がつらしボーナス懐に　雅
爺婆連れて布畦への旅　八千代
弁当の蓋の米粒戦中派　同
鴉はびこる裏の公園　代々子
花曇り遠山を見る埴輪の目　八重子
かげろふ踏みて自転車を漕ぐ　代々子

東明雅捌

春愁の思ひを秘めし七部集　江
妖しの影の現れてまた消え　代々子
サミットに集ひし党主それぞれに　信
心太食ひはったいに噎せ　江
清貧に生きてこの世に半世紀　雅
テイッシュペーパーきりもなく出る　八千代
潮の香の同棲時代くされ縁　江
私やっぱり夫婦別性　八千代
燃えるごみ燃えないごみははっきりと　江
ベカンベ祭りに集ふメノコら　信
灯を消して名残の月を惜しみけり　同
つづれさせとやこほろぎの声　八重子
放課後の校舎立たされ坊主ゐる　八千代
良寛様は手毬つきつつ　信
墨の香の匂ひ立つなり日本海　八重子
春のショールの風になびきて　代々子
花吹雪下天の夢の醒めやらず　雅
壬生念仏の鉦の鳴るなり　八重子

江戸風鈴

意鳴り江戸風鈴の鳴りにけり　篤子
　山梔子にほふ四阿のかげ　啓世
白服の中学生の足早に　あかり
　テレフォンカードピッと取りだす　啓子
月円か馳走ならべて友を待つ　紀子
　夜長のための推理小説　智恵
一本杉かすめつはぐれ雁のゆく　政志
　たかぶりのこる細き衿あし　恵
貸した金指輪の代と割り切って　紀
　辞任発表さきがける人　志
Jリーグ始めたとたんオフサイド　紀
　チワワに似たる子供抱きぬ　世
熱燗をくみて屋台の月きよし　り
　何の噂か大くさめする　志
イスラーム聖地の旅をこのたびも　恵
　川底深く古き陶片　啓
花吹雪籠いっぱいにあふれゐて　同
　忘れ霜ふむ庭の隅っこ　世

穴澤篤子捌

青鰻の味見いかがと聞かれゐる　り
　漢字変換ワープロの芸　同
眉かいてのろませっかちぐはぐに　世
　ひと皮むけば誰も同じよ　志
毒消売おまけにくれし薄荷水　り
　山小屋の主かぶる夏帽　恵
若後家は覚悟の上でありしかど　志
　男嫌ひのほんに床好き　紀
原っぱの押し倒されし草の形　啓
　諸葛孔明征けば残月　世
秋の蝿髭に這はせて座る爺　啓
　閻魔参りの列につきゐて　篤
うそ寒の角をまがればぶらりひょん　紀
　こつこつ削るヴィオラ手造　志
挽きたてのエスプレッソをすすめられ　啓
　群なす鯉にとけし薄氷　恵
夢に出てよもつひらさか花満つる　篤
　画架を置きけるかぎろひの中　恵

未草

雨の日は少し傾き未草　弘子
　揃ひて向きを変ふる緋目高　孝子
梅焼酎切子に満たし食前に　哲
　ニューミュージックCDをかけ　道子
ジグザグの道連れだちて山の月　澄子
　藪に放てる初猟の犬　香
美術展伯爵夫人招かるる　孝
　スカートの下隠す間男　道
狙ひうち二丁拳銃奴とヤツ　哲
　再編成とはやる政治家　澄
月光に雪蒼むなり京の町　孝
　鉄鉢の手の胼に滲む血　同
漢方に凝りて薬袋いろいろと　香
　鈍行列車窓に茶の缶　道
姉妹人形劇の旅一座　孝
　へたな駄洒落で無理に笑はせ　哲
花疲れあんぱんのへそほじくりて　道
　春宵ひそと千金の夢　孝

市野沢　弘子　捌

蝶の舞ひマリア観音ゑみほのか　澄
　堂に響かふボーイソプラノ　哲
売人が柱の陰に渡す粉　孝
　厚化粧してかくす寝不足　同
雷に手順狂ひし閨の技　哲
　帰る帰さぬまたも燃え立ち　孝
追ってくるべとべとさんの下駄の音　道
　老いのたつきに毛皮てばなし　香
サッカーのオフサイド未だのみこめず　澄
　十円コピー順番を待ち　哲
公園に織月高く占ひ師　同
　すいっちょ時を刻む叢　孝
気になりし座敷の障子張り替へん　道
　いろはにほへと写すくづし字　澄
協力隊日本語学級教へゐて　道
　太古の砂を行きしキャラバン　香
花大樹ただ懐かしく打ち仰ぎ　弘
　どの枝からもこぼすさへづり　澄

青梅

金久保　淑子　捌

青梅の笊をこぼれてはづみけり　淑子
　てんとう虫の止る濡れ縁　千町
登山帽バッジの数を自慢げに　冬乃
　パフォーマンスで沸すキャンパス　光子
稀観本扱ふ書肆を照らす月　隆秀
　温め(ウ)し酒に酔を重ねつ　本屋良子
新絹の仕立下ろしを身にまとひ　町子
　アフロディテのやうな横顔　同
愛憎を乗せて夜汽車の遠ざかり　良
　ぽつぽつと噛む小丸煎餅　乃
金権の味忘れ得ず立候補　光
　三日たっても帰り来ぬ犬　良
くさめするピエロに月のほそぼそと　乃
　クリスマスカードりぼん描き添へ　良
ばば様の眼鏡わたしが磨く役　乃
　素焼の壷の並ぶ軒先　秀
花筏八重の一房のせて揺れ　町
　春泥の道踏みて出勤　秀

何(ナオ)と聞く古今伝授の呼子鳥　良
　鬚髭髯のはやるこの頃　町
使ひ捨て写るんですのＰＲ　秀
　王府井にまんとうを買ふ　良
頼まれて無聊をかこつ蝿叩き　秀
　ふっとよぎりて残る香水　光
盃の毒か媚薬か飲みほせり　町
　御領主様の天蓋の閨　淑
月代にチェンバロの音の響きゐて　光
　港見下ろし黄落の坂　乃
雁の列文殊菩薩の笑みに逢ふ　町
　俳魂永久に逝きし楸邨　秀
曳(ナウ)き売の八百屋にもらふ挿柊　光
　町内会の回覧がくる　乃
恐竜の模型で遊ぶ子供達　町
　土むくむくと庭の啓蟄　良
夢のごとけふ咲き盛る花に佇つ　淑
　遠く遥けき蜃気楼見ゆ　良

風蘭

雲垂れて風蘭ひそと匂ひけり　志げ子
青き蜥蜴の横切る敷石　瑞枝
単帯藍大島に合はすらん　和子
デッサン教室通ふこの頃　健悟
双塔のビルのあはひに月明し　千雪
秋の埠頭にひびく口笛　淑代
初猟(ウ)の銃身脇にひたと付け　枝代
虐める事の甘き快感　和枝
大黒のもらす溜息けふ三度　悟枝
塩漬けのまま又下がる株　雪枝
先物を買った酬ひの小党派　代雪
サッカールールやっと覚えた　和代
月中天めぐる盃淑気満つ　悟和
猿かしこまる信長の前　枝悟
甲比丹は南蛮帽子になに憂ふ　和枝
メンソール入り煙草一服　代和
連弾のマーチはずみて花の午後　雪代
乳母車押す人ののどらか　雪

蒲原　志げ子　捌

浅間(ナオ)より富士へ渡るか春の虹　和
トールゲイトの進む無人化　枝
平らげるワンパウンドのステーキを　枝
鯉口切った夕立のあと　代
すり寄って囮捜査のやくもらふ　和
不言実行総裁の額　枝
フォーカスをされたる時は過ぎし恋　悟
牡蛎はがさるる様な辛さよ　枝
引きまはし馬上役者の木の葉髪　雪
『月世界』付く茶屋の弁当　和
涼新た板塀聖句貼られたり　同
少年団の赤い羽根売る　代
傘(ナウ)寿なり思慮分別は捨てたらし　枝
パソコン通信広い交際　和
ユーラシア地図の中にて迷ふ夢　枝
隕石落ちし恐竜の墓地　代
巨匠撮る爛漫の花俯瞰して　枝
家苞にする籠のオレンジ　志
雪

風薫る

古民家の田の字作りや風薫る　路子
夏萩映す背戸の小流れ　雅代
缶ビールカチと合せて乾すならん　久美子
町内野球やっと一勝　麻子
山の端に昇り初めたる望の月　杉亭
袋の蝗のぞき込む子ら　良弥
美術展妻はたばこをすぱすぱと　麻久
知らぬ顔して浮気続行　麻弥
電話番号どこにも書かずインプット　麻
こげつきさうな鍋の煮加減　弥
辰年のあとはへび年干支の順　代
お前教祖と天の声して　久
寒月の信濃いで湯にどっぷりと　麻
蒟蒻すだれかけてゐる婆　代
のほほんと元校長は詰将棋　亭
でぢっぽーぽー雉鳩の鳴く　久
OLと車座になり花の宴　弥
エイプリルフールまたもだまされ　代

倉本路子捌

出開帳秘佛半眼指立てて　麻
湖北めぐりの速き舟足　代
恐竜の発掘現場訪ね来ぬ　久
ベレー横ちょに映画監督　亭
美女揃ふいづれあやめかかきつばた　久
金に飽かせて恋のかけひき　代
サディストに痺れるわたし変態か　久
三島由紀夫の全集を積み　亭
めざむればけふもひとりの生玉子　麻
残月淡し犬の遠吠　代
霧はれてエッフェル塔の現はるる　弥
銀杏散る道人種さまざま　麻
爽やかに皇太子妃を迎へけり　代
祖先たぐればみんな親類　弥
箏の会揃ひの着物臙脂にて　麻
白鳥帰る北国の果　亭
車椅子とどめて仰ぐ花万朶　路
春を讃へて口ずさむ歌　弥

土用太郎

雨がちの土用太郎の巷かな　元子
　のうぜんかづらそよぐ生垣　遊
ところてん辛子酢きかせ咽ぶらん　好敏
　しりとり遊び猫も顔出し　淳子
星ひとつ従へ月の昇りきて　一恵
　美術展へと立てるイーゼル　冨美
制服(ウ)の紺に映えたる赤き羽根　遊美
　お下げほどきて彼の助手席　恵
母上京戸棚に蹴込む男物　淳
　負けが勝なり勝は負けなり　敏
恐竜の卵ぞくぞく掘り出さる　同
　満員電車中吊りを読み　美
新海苔の匂ふ弁当昼の月　淳
　置炬燵してさばくおみくじ　遊
代議士の引越し忙し永田町　恵
　西鶴没し三世紀経し　敏
花名所たづぬる旅のはじまりぬ　美
　汁とばし剥く春の小蜜柑　淳

下坂元子捌

鴬(ナオ)の籠の水壷は翡翠にて　恵
　那智の黒石蹲に据ゑ　遊
辛辣な噂話をにこにこと　淳
　ヨットひたすら風を待ちをり　遊
夕焼けのトプカピ宮殿モスク見え　恵
　氷に注げば白濁の酒　敏
ひそやかに魔性のうづく胸の内　美
　楽屋見舞にことよせて抱き　敏
青髭も老ゆれば札をばらまきて　淳
　柩に納むラベンダーの香　恵
月光にピアノソナタのたゆたひつ　敏
　藤の実はねて叩く鎧扉　淳
やや(ナウ)寒の庭の箒目清らかに　美
　サイクリングの一団の過ぎ　遊
ダイニング笛吹ケトル聞きて立ち　同
　帰国の知らせ届く絵葉書　美
欄間彫る匠の里の花大樹　元
　蝶のくぐれる古き山門　恵

梅雨の果

東　郁子　捌

橋いくつ烟る大川梅雨の果　郁子
青酸漿の並ぶ軒先
涼やかに三部合唱響き来て　八代良子
英語ノートに記すマーカー　恵美子
中天に月皓々と野分後　達子
菊人形の仕上まかされ　利子
鰯(ウ)を肴にきゅっと純米酒　豊美
粋といなせが一目惚れして　恵
暴走族ここにもロミオ・ジュリエット　利
マンハッタンを包む喧騒　豊
尋ね犬貼り紙吹かれ公園に　利
単身赴任ふたたびの冬　達
お晩です月の雪道ゆづり合ひ　良
はしゃぐ子供ら宅配のピザ　達
複雑な首班指名の面白さ　良
産土神に願を掛けをり　郁
樹木医の叩けば花の声がする　利
風に任せて紙鳶(いかのぼり)舞ふ　同
豊

乗(ナオ)り降りは自由のどかなバスの旅　郁
蛸唐草の壷をもとめて　達
掛軸の伝貫之の筆軽く　同
腰痛体操効果抜群　良
砂日傘人の溢れて賑はへる　良
拾ふ恋あり捨てる恋あり　恵
死ねないわ一緒に死ぬと言ったけど　利
紅茶に添へて選ぶ点心　良
恐竜に追ひかけらるる夢うつつ　豊
のっぺらぼうが薄笑ふ月　同
日展に見事入選したる友　達
円高手当なくてうそ寒　恵
還暦(ナウ)を祝ふ計画耳に入り　恵
故郷に錦飾るキャスター　利
一湾を立山連峰囲むらん　良
蝶つぎつぎと羽化のはじまる　恵
くぐりゆく花のトンネル結願寺　郁
春のコートのひるがへる裾　達
恵　利

全国連句いなみ大会

平成五年七月三日
於　富山県井波町瑞泉寺

文　秋元正江
半歌仙十巻

井波町は、富山県西南部の散居村で名高い砺波平野の南端にのどかに連なる八乙女山の麓にある、静かなたたずまいの町です。石畳の坂道を登れば名刹瑞泉寺、そこかしこから槌の音が響き楠の香りが漂い、信仰と芸術の清らかな町です。

「浪化とその時代展」岩倉節郎氏によると、瑞泉寺御連枝浪化上人はわずか七才にして入寺、幼少の頃より俳諧を学ばれました。芭蕉は奥の細道の旅すがら、越中は、〝わせの香や分入る右は有磯海〟の一句を残しただけ通り過ぎてしまいました。その時、上人は上京中で会うことができず、後〝早稲の香や有磯めぐりの杖のあと〟と追慕の句を『有磯海』の巻頭にのせました。元禄七年、去来は東本願寺に滞在する上人に連絡をとり　上人はこの機会を逸しては生涯芭蕉と対面することはできないと思い五月末近く万難を排して嵯峨野落柿舎の芭蕉を訪れたのです。ここで巻かれた去来・浪化・芭蕉の三吟歌仙が「落柿舎即興」として元禄八年に刊行された『となみ山』に寄せられています。この年に芭蕉が没してこれが最初で最後の対面でした。その落柿舎で浪化上人が芭蕉に入門して三百年になるのを記念して、井波町で「全国連句いなみ大会」が平成五年七月三日に催されたのです。

七月二日東京発七時三十六分のあさひ一号で長岡、かがやき二号で十一時九分高岡着、出迎えのバスで一路井波へ、途中、ま新しい獅子の大きな木彫りに出会いました。

午後から「井波史跡と五箇山巡り」のバスに分乗、緑にしみる山峡を越中五箇山へ進路をとりました。

先ず、準五階建て合掌づくりの岩瀬家に入ると夏炉が焚かれ、一尺角の大黒柱、急階段をよじのぼれば、床板が透かしの目皿になっていて、養蚕時に下からの暖をとり通風をよくする為とのことでした。先祖代々の信仰を伝える仏壇も大へん立派で、その前に敷かれた月の輪熊の毛皮が擦り切れているのも印象的でした。ついで史跡公園高瀬遺跡へ、ここは奈良時代から平安初期にかけての東大寺荘園跡といわれ、立並ぶ太い柱根群に、花菖蒲がいっせいに咲いて白と濃淡の紫の花は少し曇ってきた荘園跡にやさしく似合いました。

遺跡内にある井波歴史資料館では、越中俳壇の華「浪化とその時代展」がひらかれ、その貴重な資料の数々をまのあたり見て、もっと時間が欲しいと思うひとときでした。

木彫りの里では獅子頭や欄間彫刻の実演を見学、彫刻師の鑿さばきに驚いたのです。

バスは井波町に戻り黒髪庵へ参りました。浄蓮寺境内の黒髪庵にある卵頭型の翁塚、「是レ本邦翁塚之始也矣」の文字があり、元禄十四年（一七〇一）芭蕉の七回忌にあたり浪化上人が建立したものです。全国における芭蕉の塚の中で最も古いもので、その向いに加越能の俳人によって建てられた黒髪庵があり屏風が飾られ床しい雰囲気でした。傘を持った人達でこの庵の庭を埋めつくしたのも珍しいことでしょう。

翌七月三日、瑞泉寺会館二階ホールで、開会式、十時から二十五会席に分れて実作

となりました。この俳席も地元の方や、昨年度の津幡の方達と一緒に巻けるという、こまやかな配慮も嬉しいことでした。後日井波の教育長吉崎一郎様からこの大会は、二村文人先生との運命的とも云える出会いと、先生を通じての猫蓑会の皆様との出会いの不思議でした、というお便りを頂きました。文人氏は明雅先生の信州大学時代の教え子で東京にお住いの頃、柏や関口芭蕉庵で一座いたしましたが、富山大学への赴任がきまった平成三年三月三日、

雛あられの巻　文人　捌

雛あられこぼれしままの緋毛氈　文人

春遅きの巻　千恵子　捌

春遅き富山に向けて友送る　千恵子

を発句に二歌仙が巻かれたのもついこの間のように思えるのです。

二日夜は瑞泉寺で明雅先生、徒司氏、私で文人さんの指導していらっしゃる地元の方達と雨音を聞きながら半歌仙を巻きました。短冊も沢山出して下さり、又、自他場もしっかりわきまえてお作りになるのです。

文人先生は井波の地にしっかり俳諧の座をお育てになりました。

募吟二百三十巻の歌仙から選ばれた猫蓑関係の作品は次の通りです。

富山県知事賞　年惜しむの巻　片山多迦夫　捌
　　原田　千町

富山県教育委員会賞　霧の影の巻　矢崎　藍　捌

井波町長賞　啓蟄やの巻　東　郁子　捌

富山県連句協会長賞　富山新聞社賞　浮鷗の巻　副島久美子　捌

北日本放送賞　大根をの巻　下鉢　清子　捌

富山テレビ賞　破魔矢持つの巻　坂本　孝子　捌

実行委員長賞　柳の芽の巻　瀧川　雅代　捌

実行委員長賞　弥生尽の巻　小林　千雪　捌

実行委員長賞　二ッ月の巻　下坂　元子　捌

実行委員長賞　阿蘭陀渡るの巻　原田　千町　捌

実行委員長賞　八角　澄子　捌

黒髪庵　秋元正江　捌

黒髪庵青葉がくれの小石かな　秋元正江
　徽の匂へる一行の軸　吉田弘子
子の習ふソナチネの音響くらん　浅賀淑代
　糖分控へ焼きしクッキー　細山芳絵
山間に淡くのぼりし月の弓　綿抜豊昭
　舟を操る菱採りの沼　子

丹精にデコイ仕上げて秋惜しむ　代
　ふたりで行きし北欧のベル　昭
乗りついで玉の輿までもうちょっと　絵
　整形手術いくたびぞする　昭
貸してやる金にしっかり釘を刺し　絵
　岩壁かすめ舞へる隼　子
家持の筆持つ像に凍てし月　代
　自慢の地酒酌みて老いたり　同
ゲートボール・ガードの下がわが世にて　絵
　テリア付きくる遠足の列　子
たはむれにたたき賜ふな花の幹　同
　名残りを惜しむおぼろよの碗　絵

緑蔭や　東　明雅　捌

緑蔭や夢の元禄翁塚　東　明雅
　藁屋の軒に群るる子燕　犬島　正一
誘はれて匠(たくみ)の里のフォーラムに　藤江　紫虹
　干菓子頂き先づは一服　繁原　敏子
夕月は親しきものと眺めをり　福永　鳴風
　更けて澄みゆく鈴蟲の鈴　細山　吉女

秋(ウ)深し京には多き通し土間　風
　雨も乙(おつ)だね傘が縁とは　敏
ミデアムの声に惑ふか惑はぬか　同
　放生池もささ濁りして　風
荒壁に吊りし茶掛も寂びまさり　女
　ワープロピピと止めて燗酒　一
抑留記読むや寒月昇り来し　女
　埒もなかりし老の泪目　雅
運不運長者は何故か水瓶座　虹
　天安門に駘蕩の旅　同
花万朶太極拳はゆるやかに　一
　静寂(しじま)破りて雉の鋭(と)き声　執筆

梅熟るる　内田麻子　捌

彫られたる竜の眼や梅熟るる　内田　麻子
　半夏生明く川添ひの町　杉内　徒司
掻き鳴らす琴の音流る離れ屋に　山水　キン子
　翡翠の指輪久々にはめ　田村　京子
転勤を見送る空港細き月　猪子　春治
　尾越しの鴨のつらなりて来る　高木　介雄

ひら(ウ)ひらと幟はためく秋祭　キ
　辛党好み銘酒立山　雄
初めてのデートに誘ふ五箇の里　京
　大樹の陰であげた唇　治
そのままに進まぬものが恋の闇　麻
　夜汽車の席にうつらうつらと　司
凩に微動だにせぬ瑞泉寺　治
　雪ころ落す高下駄の爺　キ
政治改革ならず風雲急となり　京
　人間万事ケセラセラセラ　司
句座開く花満開の月影に　京
　眠蚕しづかなる棚の並びて　雄

杉落葉　式田和子　捌

越中の御一宮杉落葉　式田　和子
　玉砂利きしむ涼し靴音　中嶋　昌子
お手製のケーキほどよく焼き上げて　戒能　多喜
　集ひ来る児の笑顔よろしき　上杉　重章
町並の甍かがやく良夜なり　重松　とみ
　うるか買置きいつかなくなる　金子　容士

秋(ウ)深く箸を絵筆に取換へて　章
　がんばりますと免許更新　昌
巡察の通過惨劇村荒涼　章
　ひそと残れるひとのやさしき　喜
告白のあとにしばらく間のありて　士
　ぎゅうと抱きしは雪女郎かも　み
牛丘の頂しるき冬の月　士
　集団離党ゆれる政局　昌
夢にまで見しパリーからロンドンへ　喜
　カメオ彫りゐる店に子雀　み
爛漫の花に卒寿を祝ふ宴　喜
　春は静かに川流れゆく　章

半夏　下鉢清子 捌

越中の木彫りの里も半夏かな　下鉢 清子
苔に滴る高き石垣　長谷 登世
大鍋にカレー煮つむる素足して　荒井 信子
誕生祝ふ集ひ楽しき　野原 すみこ
自転車の後追うて行く望の月　佛渕 健悟
赤い羽根つけ口笛の子ら　登

ウ
山襞のくっきりとあり鳥渡る　信
思ひがけない手紙来てをり　悟
鉄幹と晶子の恋はわが理想　す
フィリッピーノに心奪はれ　清
NTT新型機器を売り込みに　悟
吠えるだけ吠え寺の老犬　信
月中天炉端に卵酒を呑み　す
旅の土産に厚きマフラー　登
過疎の村湧き立ちてゐる総選挙　悟
悪役だけで通す生涯　同
ドラの鳴りゆるりと花見船に乗る　登
一直線に飛んでゆく蜂　信

夏もなか　杉江杉亭 捌

軒先の五色幔幕夏もなか　杉江 杉亭
足許涼し軋む廻廊　森松 和子
児童らは劇見学に集ふらん　峯田 政司
おとなりさんと啜るコーヒー　山田 静穂
山峡にのぼりし月を湯の宿で　荒井 恵子
秋風渡る川沿ひの道　志

ウ
リュック背に落葉踏み踏み女学生　恵
恋人の名の鉢合せする　志
神頼み仏頼みにおみくじを　亭
ルージュ濃いめに旅に出で立つ　和
金絲猴本邦初のご披露し　静
出番待機の候補面々　志
寒月を浴びて若ィ衆片手乗り　和
消防サイレン響く町中　志
独り居の老の増えゆくご時世か　静
ふと見失ふ吹かれゆく蝶　和
野暮用も万朶の花へ遠まはり　静
海路遥かに蜃気楼立つ　恵

吟醸の冷酒　中川 哲 捌

吟醸の冷酒含みし翁哉　中川 哲
お国自慢にあくる梅霖　朝倉 一緒
ジョギングは必ず犬がお供して　五味 蓉子
城趾公園水豊かなり　二口 けい子
大杉の真上にかかる月まるく　緒
到来物の甘柿を剥く　蓉

ウ
わが狭庭なにをついばむ椋の来て　け
白き項でふりむける女　哲
そはそはと時計の針を気にしつつ　緒
妻の忌明けも待たぬうちから　蓉
マドリッド発モスクワへ直行便　哲
ピアノレッスン指の霜焼　緒
わびぬれば月冴々と玻璃戸透く　け
獄舎にありてはげむ脱税　哲
飛ぶ夢を子らに抱かせピーターパン　蓉
春一番に土の黒々　緒
尖塔にともども向ひ花万朶　小林 千雪
笑ふ山脈茫洋のとき　け

八乙女山　中島啓世 捌

八乙女山茂り豊かや法の町　中島啓世
梅雨の最中の古き竜門　市野沢弘子
縁側に鼓の音をひびかせて　岩井睦女
園児の列に雀こぼるる　寺本狸伯
鉄路をば月皓皓と照らしをり　伊東桃庵
喉を鳴らして稍寒の水　子

秋刀魚焼く露地を抜ければ駅の前　庵
フィリッピンより着きし嫁御よ　子
フラメンコ命の色は耀へり　女
今夜は駄目と猫を蹴飛ばす　庵
迷走の船の行方は票の上　伯
荒れ気味といふヘクトパスカル　女
凍月に気功の念を放ちたり　伯
一病息災生姜酒飲む　子
靖国に二礼二柏手慰霊祭　庵
蛙捕ること身過ぎ世過ぎに　世
花の枝挿して旅の荷軽くせり　子
春泥の靴土間に並びて　庵

萬葉の　原田千町 捌

萬葉のむかしを鳴けやほととぎす　原田千町
山滴りて大いなる渓　鈴木美奈子
塗の膳会席料理戴きて　小山西置
当歳の子をあやすお隣り　高木義子
月天心停泊長き他国船　小薗照子
メヌエット聞く蔦の洋館　奈

盆僧の袈裟を鞄に角を行く　置
夢二の版画復刻で売れ　照
労咳は知らぬ世代に育ちをり　奈
片思ひしてひとり悩める　義
抱かんとすれば兎のやうに逃げ　奈
火伏の松に沁むる寒月　置
刀剣に生命吹き込み賞を受く　同
ゴルフ帰りの酒が愉しみ　義
父母の揃ひて明治より平成　町
日は永くして政変の記事　奈
幸せの降るが如くに花枝垂れ　義
連衆集ひ春の麗か　照

夏も永久　福井隆秀 捌

家持の立山の雪夏も永久　福井隆秀
岩蔭を縫ふ雷鳥の声　中野泰子
手醸しの酒を酌みつつ語らん　片山多迦夫
息子自慢も鼻につきたり　泰
仄とあるビルの狭間の月仰ぎ　同
十数本も並ぶ鶏頭　秀

美術展集ふ一門はなやかに　迦
お目当ての娘に贈るかんざし　泰
恋さまざま載せて巴里へジェット便　迦
気もそぞろなり選挙近づく　泰
冬場所の引退相撲飾る月　迦
うすあかりてふ湯豆腐の鍋　秀
洞窟に犬が喚けど何も出ず　迦
究めるほどに古代史は謎　同
潜りてはまた現れて海女の笛　泰
径たづぬれば蝶々の飛ぶ　同
ひたすらに数珠まさぐりぬ花の昼　秀
都忘れと名づく室あり　迦

連句会案内

（（（（（））））

◎連句教室

日　時　第一日曜日　午後一時～五時

会　場　江東芭蕉記念館

江東区常盤一―六―三

（電）三六三一―一四四八

◎柏連句会

日　時　第二日曜日　午後一時～五時

会　場　光ケ丘近隣センター

（南柏駅よりバス　光ケ丘団地マーケット下車）

（電）〇四七一―七五―三七四六

◎A・C・C連句・理論と実作

日　時　第二・四土曜

午前十時～十二時

会　場　新宿住友ビル四十八階

朝日カルチャーセンター

（電）三三四四―一九四一（代表）

◎猫蓑会（会員制）年四回

（一月・四月・七月・十月　第三水曜日）

会　場　江東芭蕉記念館

江東区常盤一―六―三

（電）三六三一―一四四八

雁帛往来

▽五月二日、深川連句教室、会者二十名、三卓に分れ歌仙興行。

▽五月六日、新宿ホテルセンチュリーハィアットで式田和子さんの出版記念会出席。

▽五月八日、A・C・C、秋元・式田両講師の講義に感謝す。

▽五月九日、柏連句会、会者十二名、三卓で二十韻興行。

▽五月十九日、柏広池学園に行き「なんじゃもんじゃ」の花を見る。

▽五月二十日、午前中、神代植物公園に行きバラを見、午后六時、電通連句部に出席。

▽五月二十二日、A・C・C、終って代田橋大橋会館の「土良の会」に出席。

▽五月二十五日、上野韻松亭の「四佳の猫会」に出席。

▽五月二十六日、亀戸天神俳諧奉納式。終って錦糸町コーベベルで直会の俳諧。

▽五月二十九日、紀州熊野詣を志し、三十一日まで、熊野三山・那智滝を見る。

▽六月四日、「季刊連句四十一号」発送。

▽六月六日、深川連句教室、会者二十名、三卓に分れ興行。

▽六月九日、深川清澄公園で猫蓑同人会、五卓、二十五名参加。

▽六月十二日、A・C・C。

▽六月十三日、柏連句会、十五名出席。

▽六月十七日、電通連句部出席。

▽六月十九日、名古屋A・C・Cに出講。

▽六月二十六日、A・C・C。

▽六月二十八日、全国連句いなみ大会（七月二・三日）のため、富山の娘の家に泊る。

季刊「連句」第四十二号

平成五年九月一日発行

編集人
発行人　東　明　雅

季刊「連句」発行所

〒277 柏市つくしが丘二ノ二ノ一二　東方

電話　〇四七一（七五）一一九二

振替口座　東京七―五二一三三

印刷所　株式会社 岩田印刷

〒277 千葉県柏市酒井根六二六―一

電話　〇四七一（七四）〇一八三

定価　一部　五〇〇円　送共

一年　二〇〇〇円　送共

連句辞典

東明雅・杉内徒司・大畑健治編

連句の実作・鑑賞・研究に必須の知識をすべて網羅！初心者から研究者まで使える本邦初の連句辞典

B6判
三五二頁
三五〇〇円
三版

本書は、用語篇、人名篇から成る。用語篇は、現在使われている用語を中心に三二四語選び、意味・用法の解説をし、「参考」欄の引用文は中・近世の諸資料から、用語がどのように記されているかを抄録。人名篇は、近代以降に活用した連句人、俳人五十四人を選び、項目末尾に代表的な連句作品を収録した。また、連句入門の手引き、連句概説、連句略史を付した。近代連句の状況を知る上で貴重なものである

収録項目例

〈用語篇〉挙句　会釈　一座一句　有心　打越　思いなし　表八句　懐紙　歌仙　軽み　切字　景気　五句目　差合　去　式目　四春八木

〈人名篇〉天野雨山　伊藤松宇　上田聴秋　鵜沢四丁　小林見外　下平可都三　関為山　高橋玄一郎　高浜虚子　中村俊定　野村牛耳

水原秋桜子編

俳句鑑賞辞典

二三〇〇円

貞徳・宗因から現在活躍中の俳人まで二七〇人の古典的かつ伝統的な名句一〇〇〇を収め、豊かな実作の経験を生かし句作にも役立つ

水原秋桜子編

現代俳句鑑賞辞典

二八〇〇円

結社や傾向にとらわれず現代の代表的な俳人五〇五人の代表作一四六八句を収め、公平に客観的に鑑賞した。俳句鑑賞辞典の重複なし

大後美保編

季語辞典

二八〇〇円

日本の季節にまつわる言葉をスモッグ・不快指数などまで収録し、春夏秋冬の四季に分類した。気象学者の立場から厳密に季節を分類

中村俊定監修

難解季語辞典

四五〇〇円

古典俳句に使われる季語は今日では意味や表記が難解で正しい解釈や鑑賞ができない。本書はそれらの季語二千語を収め、解説を施す

国語学大辞典　国語学会編　B5一九〇〇〇円

国語慣用句大辞典　白石大二編　A5六八〇〇円

国語慣用句辞典　白石大二編　B6二二〇〇円

国語史辞典　林巨樹他編　B6三五〇〇円

日本語語源辞典　堀井令以知編　B6一八〇〇円

京都語辞典　井之口・堀井編　B6一八〇〇円

擬音語擬態語辞典　天沼寧編　B6三五〇〇円

隠語辞典　楳垣実編　B6三八〇〇円

近世上方語辞典　前田勇編　A5一五〇〇〇円

花柳風俗語辞典　藤井宗哲編　B6二三〇〇円

明治大正新語俗語辞典　樗島忠夫他編　B6三八〇〇円

難訓辞典　中山泰昌編　B5三二〇〇円

名乗辞典　荒木良造編　B6二八〇〇円

名数数詞辞典　森睦彦編　B6四五〇〇円

あいさつ語辞典　奥山益朗編　B6二八〇〇円

新版ことば遊び辞典　鈴木棠三編　B6五八〇〇円

類語辞典　鈴木・広田編　B6二八〇〇円

類義語辞典　徳川・宮島編　B6二三〇〇円

表現類語辞典　藤原与一他編　B6四八〇〇円

新版文章表現辞典　神鳥・村松編　B6二九〇〇円

東京堂出版　101東京都千代田区神田錦町3-7　電話03－3233－3741～2